

2021年度学内版 GP 成果報告書

取組名称	木遣いができる人材育成プログラム～里山を活用した森林の消費者育成	
実施組織 (または対象のカリキュラム)	工学部建築学科佐倉研究室	
※連携する他学部・機関がある場合は記入	キャリア教育・サポートセンター(ローカル・イノベーター養成コース) NPO 法人フォレスト工房もくり 余頃友康 一般社団法人 日本笑顔プロジェクト	
実施責任者(所属)	佐倉弘祐	
取組の目標	① 林業に関わる方だけでなく、多くの人が森の事を知り森と関わる必要があると考え、森の維持管理や森の木を伐りだすプロセスに参加し、里山との関係を再構築する。 ② 今まで交わらなかった人材、里山環境との新たな接続、新しいアクティビティを創出する。 ③ 地域木材、木こりの知見、地域の森林資源の加工場、製材拠点を見学し、加工・流通のプロセスを学ぶ。 ④ 現場での経験、危機管理は、災害時に備えた平時のスキル形成、災害時にも行動できる力を備えた人材を育成する。 ⑤ 身近な地域資源を扱える人材、学ぶ場として地域フィールドを活用する。本取組の場所は、森林組合の管理が届かない小規模な人工林で、近年管理が行き届かず、地域課題になっている。 ⑥ 森林資源の利用を検討し、消費の仕方として地域経済循環を学ぶ	
1. 目標達成のために行った活動と成果 (簡条書きで項目ごとに番号を付けて記載。成果の詳細は必要に応じて別添とする)	① 林業を林業だけで解決するだけでなく、より出口を意識し、プロダクトやサービスなどユーザー側から考える必要な森林資源やサービスを考える。飯山市では、里山ローカル SDGs を構想し、関係人口や交流人口による里山や田園の維持・管理を模索しており、本事業もその一環となっている。→未来の建築設計を担う世代に直接学ぶ機会を持てた効果は大きいと感じている。さらに、チェーンソー講習参加者へ森林の現況を話す機会は、防災意識や森林の維持管理をしていくことの重要性を林業に今まで関わる事がなかった層へ伝える機会となり、今後消費や木材利用の意識を変えるきっかけとなった。 ② 工学部建築学科では、講義などの中で実際に木を加工する機会が少ない。信州には雄大な森林資源があり、学ぶフィールドがあるが、建築資材である木に対して、直接触れ学び機会がない。そこで、信州で木を使う必要性や環境経済的意義を学んでおくことで、将来建築業に従事し家を建てる機会になった際に、木を使う選択をする意識が醸成された。また、建築に関わる人材が県産材に触れる機会となった。	
2. 目標達成度に関わる所見と今後の展望 (達成の度合いを選び、そう評価する理由と今後の展望を記述)	a. 達成できた	(評価理由) 森に関する講義、伐木・造材、木材加工の基本スキルの習得と作業体験を行い、チェーンソーを扱える 20 名の学生が輩出された。伐り出した間伐材と古材を活用した活動拠点の整備を行い、製材作業や基礎づくり等の行程を、職人の指導のもと行い作業を通じて 120 名の建築学科の学生を中心に、建築に関わる人材が県産材に触れる機会となった。工学部の学生にも伐木造材講習や基礎づくり体験は好評で、連携した地域の団体とも継続的な企画に発展した。森林整備や防災意識向上の機会にもなり、充実した取り組みとなった。
		(今後の展望) チェーンソー講習参加者へ森林の現況を話す機会は、防災意識や森林の維持管理をしていくことの重要性を林業に今まで関わる事がなかった層へ伝える機会となり、今後消費や木材利用の意識を変えるきっかけとなった。森への関わる機会を新たなに創ることで、林業以外の視点で森に関わる活動や、経済的価値や交流の充実による地域・地元定着に繋げていきたい。 森を通じて環境、建築、防災に貢献するような人材の育成を支援していくため、地域と一緒に学ぶ拠点を引き続きつくってきたい。